

目的 19世紀ヨーロッパの服飾には、過去に流行した服飾形態の模倣がしばしば見受けられる。その中から16世紀後半から17世紀初期にかけてヨーロッパ宮廷において大流行を示した襷襟飾り・ラフの再出現について取り上げる。その出現年代を明確にし、流行の背景を考察する事により、ルネサンス期のものとは異なる19世紀のラフの美意識を探る。

方法 資料として、当時の雑誌“The Ladies’ Monthly Museum” (London)などを中心に用いる。服飾の流行の諸相に関する記事及び挿し絵からラフの出現状況について把握する。

結果 19世紀にラフが着装された契機は、フランス・ナポレオン皇帝による17世紀趣味にあると思われる。1807年頃のフランス絵画にはラフを含めて17世紀風の宮廷服飾を着用した肖像画などが見受けられる。一般的な婦人の風俗画では、フランスにおいては1810年前後から、イギリスにおいては1815年前後から1830年前後にかけてラフは描かれている。イギリスの月刊誌から分析すると、1816年から1826年頃まではラフの出現は冬期（11月から3月）、夏期（7月から9月）の2回に分かれる。しかし1829年から1830年頃にかけては毎月の様に出現しており、ラフの流行の最盛期と考えられる。この推移はドレスのシルエット自体が、19世紀初めのハイウエストでタイトのものから、1920年代に丸みを帯びた広い肩のラインと細いウエストと大きな裾広がりスカートとの組み合わせに変化したことと呼応している。後者は裾飾りやショルダーラインにも襷飾りやレース装飾を多用し、全身を軽快で立体的なシルエットに仕立てている。19世紀のラフはルネサンス期のものとは異なり、巨大化する事はなく軽快で可憐な装飾品であった。